

現代日本語のニヨッテの意味機能

西 本 勝 博

1 はじめに

本稿は、現代語におけるニヨッテにみられる意味機能について、どのような条件において実現するのかを明らかにしようとするものである。ニヨッテの語構成は、動詞ヨルを核として構成されている。どのような意味機能においても、動詞ヨルの意味は反映されていると考えられる。形態面から見ればニヨッテの他にニヨレバ／ニヨル／ニヨリなどもあるが、本稿では受身文における動作主を表すニヨッテとの関連も考え合わせて、考察の対象をニヨッテにのみ限定して行いたいと思う。なお、以下では、ニヨッテに上接する名詞相当を前項、ニヨッテが導く述語部分を後項と呼ぶことにする。

2 従来の研究と問題点

ある格助詞の意味機能が実現するにあたって、その上接する名詞や文の述語動詞の意味的特徴と関連していることはよく指摘されることである。そういった点で野村(1984)の行った分析方法は妥当なものと考えられる。そこで、ここでは、まず、野村(1984)の分類にしたがって、ニヨッテの全体像を確認しておきたい。

- (1) 「権限への逃避」はそれぞれ縦に天皇の権威と連なることによって、各自の「権限」の絶対化に転化し…(自動詞文・原因)
- (2) 内戦によって周辺諸国から都が孤立し、(自動詞文・原因)
- (1)(2)は前項部分が事柄であり、後項の事態も事柄の生起を表す。自動詞文の典型としてニヨッテは原因の意味を表す。
- (3) 日本語の数詞は倍数法によって成り立つといわれている。(自動詞文・典拠・根拠)
- (4) 博士は……「すみわけ理論」によって、このことの意味を生態学的に説いたのであった。(他動詞文・典拠・根拠)
- (3)(4)は前項名詞が事柄ではなく、抽象的な名詞である。このような前項部分に抽象名詞がくるとき、ニヨッテは典拠・根拠の意味を表す。このとき、後項の述語動詞は自動詞であるか、他動詞であるかは関係ない。
- (5) 社会主義政党的首相は……イギリスの軍縮に対して、新たに努力を払うことによって、

新しい労働党政府の特徴を出したいと思った。(他動詞文・手段・方法)

- (6) 登山者は……地球表面との闘争によって人力の限界を見きわめようとする者である。
(他動詞文・手段・方法)

(5)(6)は前項部分の動作が後項の動作を行う行為者の手で意志的に行われるものである。他動詞文の典型としてニヨッテは手段・方法の意味を表す。ただしニヨッテは単なる道具を表すことはなく、次の(7)の「人力」「船舶」も「～の使用」と解釈すべきだとする。

- (7) 賠償の支払いは……国境を超える車輛で人力によって、あるいは海を渡る船舶によって物資を運搬する以外には方法がないこと。(他動詞文・手段・方法)

また、(8)は他動詞文であるが、事柄全体の生起を問題にしている場合で自動詞文のような事柄の動因と解釈される。

- (8) 飢饉によって数万の餓死者を出したような生活のはげしい変動の中で……(他動詞文)

次の(9)は「日によって」「場合によって」などの慣用的な表現に代表されるような、条件の変容に伴って生起する事柄に変動が見られる場合である。

- (9) 文法上「私」か、「あなた」か「彼か」の相違によって、異なった接頭辞が使われる。
(複数条件)

(10)はニヨッテの係り先が、他動詞部分とも可能表現部分とも取れるもので方法か根拠か判断できない例である。

- (10) 知盛という人物を新しく想像することによって、作者がなにをとらえ、かつ視ることができたか…(可能文)

- (11) 私の生命が、私の父である人が、私の母を侮辱することによってこの世に送り出されたものであるとして……(受身文)

- (12) 広大な地域が、敵味方の会戦によって粉砕され……(受身文)

(13)は補文の他動詞文的意味構造から、事柄の動因は動作・作用のもたらす主体として解釈される。また、(14)になると行為者の性格が明確に認識されるようになるとする。

- (13) 事実そのものの迫力によって圧倒されている内乱期の人々の……(受身文)

- (14) いずれ我々が米軍によって現在地を逐われるのは確実として……(受身文)

以上のように野村の分析は、文の述語のタイプ(自動詞、他動詞、受身文)と上接する名詞句(節)のタイプ(具体的事柄であるか抽象的事柄であるか)にもとづいてなされており、ニヨッテの意味を捉える上で客観的な観察であるといえる。そこでは、自動詞文におけるニヨッテの典型を原因とし、他動詞文における典型を手段としている。なお、本稿ではニヨッテの中心的な意味機能に限って考察を行うため、(9)複数条件、(10)可能文については扱わ

ない。

さて、まず、受身文におけるニヨッテについて見ておく。従来ニヨッテに関する研究の多くは、この受身文における動作主を表す場合を中心になされてきたようである。そこでは、主にニ／カラ／デといった他形式との比較検討がなされ、一定の成果を得ている。例えば、細川(1986)ではニヨッテの意味機能について次のように述べている。

受身文において「によって」でマークされるのは、材料・道具または原因・理由を示す名詞句(節)に限られる。ただし、受身文が行為の結果の状態を示す時、動作主がその状態を引き起こした使役者と解釈できれば、動作主も「によって」で示すことが許容される。

つまり、受身文におけるニヨッテの意味機能の基本は、「材料・道具または原因・理由」にあり、受身文が行為の結果の状態を表す場合に限って、動作主を表すことができる。

したがって、次のような例はあくまで(15)では原因の意味であり、(16)は材料とされる。

(15) この土地は放射能によって汚染されている。(細川(1986)より引用)

(16) くわしく言うと三種類の平面座標とホログラムによってこのシミュレーションは構成されておるです。(世界)

さらに例を加えるならば、(17)(18)の「長い距離」、「総選挙」は原因であり、(19)の「死の公開」は手段・方法と解釈される。

(17) そのふたつのエレベーターはおおよそ考えられうる限りの長い距離によって存在を遠く隔てられていたのだ。(世界)

(18) この総選挙によって、野党三派の連合が議席の過半数をしめる勝利を得て、政界の地図は大きくぬりかえられた。(人民)

(19) 戦争中の安寧秩序は、人の非業の死の公開によって保たれていたと思わないかね。(金閣)

一方、次のような例が典型的な動作主を表すニヨッテの例である。

(20) あの町は日本軍によって建設された。

動作主表示のニヨッテが二と大きく異なる点は、二が直接的関与者であるのに対して、ニヨッテは間接的関与者であるところである。したがって、ニヨッテが動作主を表す場合、その主語には非人格的な名詞句が現れ、ニヨッテにも人格的な役割が担われるとする。

(21) ふと、風によって運ばれて来た潮の香りが昔を思い出させた。(若き)

(22) 輝ける未来を、一通の投書によってだいなしにされた青年が、その恨みのために数年の間に老人になってしまったというわけだ。(ブン)

(21)(22) 「風」「一通の投書」のような一般的には有情物とされないものを金水(1991)で

は周縁の動作主と呼び、ニヨッテで示される名詞が非情物であっても、受身文においては人格的なものとして扱われるとする。こうしたニヨッテは単に動作主を表示しているだけではなく、何らかの意味も担う。(22)の風は潮の香りを運ぶ手段であるし、(23)の一匹の投書は青年をだいなしにした原因と理解されるものである。なお、(24)(25)やりもらいや(26)テアルなども動作主を表していると考えていいと思われる。

(24) 各官庁に残っている書類や証人を、検察側によって調べてもらいたいのだった。(人民)

(25) 日本の国家もまた、彼らの手によって同じ待遇を受けたのである。(路傍)

(26) 横尾の出合から一の俣小屋への道はかなりの積雪の道だったが、先行者によってラッセルしてあるから、さほど苦勞することはなかった。(孤高)

一方、能動文において、ニヨッテが有情物を表示している場合は、決して動作主と解釈されず、手段や原因と考えた方がよいと思われる。

(27) 信長によって自分の身を立て運をひらきたいと藤孝はそのおだやかな表情の蔭でもっている。(国盗)

(27)では、信長を利用して藤孝が運をひらこうとしている。他動詞文の特徴から考えると、ここは手段と理解されるが、信長は具体的な個体物としての信長を指しているのではなく、信長の権力といったような抽象的な内容と考えられる。また、次の(28)「ゲリラ」、(29)「法然、親鸞」も同様に考えられる。これらは原因と解釈されるが、ここも具体的な事物ではなく、ゲリラの攻撃や法然、親鸞の布教などが想定される。

(28) 長城の規模がいかに長大なものであったかを説明するためには、そのようなゲリラによって壊滅した駐屯部隊の情報が……(パニ)

(29) 法然、親鸞によって栄えた浄土教は、あくまでも現世否定の宗旨である。(国盗)
しかしながら、もう少し広く用例に当たってみると、以上の分析だけでは説明しきれない例が見られる。

- ・自動詞文においても手段と解釈されうるような例が見受けられること。
- ・他動詞文においても原因と解釈されるような例が見受けられること。
- ・ニヨッテには、単なる道具を表すような名詞句は来ないのか。また、根拠・典拠を表すときは抽象的な名詞という特徴だけなのか。

3 分析

3.1 自動詞文における手段

(30) 行助は、ここで冬を越すことによってある種の転換が訪れてくるだろう、と漠然と

考えていた。(冬)

(31) かれは、京で槍の名をあげることによってその噂が西村勘九郎としての住国である美濃にとどくことを期待していた。(国盗)

(32) 水は温めることによって、湯になる。

(30) では、後項で表されるのは、「転換が訪れてくる」という事態の生起である。こうした自動詞文におけるニヨッテは原因を表すものとされるが、それに対して、「冬を越すこと」は、その手段・方法と解釈できる。(32)でも、「温めること」は、水をお湯にするための手段・方法である。これらは、自動詞文になっているが、前項の内部において、他に影響を及ぼす意志的な動作になっており、それが手段・方法を表すのに関係しているのだと考えられる。

(33)(34)が自動詞であるのと対照的である。

(33) 信長が去ることによって当然、京は空白になる。(国盗)

(34) トップバッターが出ることによって攻撃の幅が広がる。

3. 2 他動詞文における原因

(35) 港に着くと、夫の手配によって日本の警官が待ちかまえていて、そこから彼女は応なく連れ戻された。(検家)

(36) 聯合艦隊は、この時、司令長官の更迭によって連合演習を中止し、紀州の和歌之浦に入港していた。(山本)

(37) そして、その後も、多分頻繁なる日本の敗残兵の出没によって、住民は再び村を棄てたのであろう。(野火)

ニヨッテで導かれる後項部分の述語動詞は自動詞ではなく、他動詞になっているが、一般的にこれらのニヨッテは原因の意味として理解されると考えられる。これらに共通していえることは、①それぞれ「夫の手配」「司令長官の更迭」「日本の敗残兵の出没」という個別の事柄を示していて、決して抽象的な事柄ではない、②前項と後項の主体が異なっている、③後項述語動詞が意図的な動作を表すということである。(37)について言えば、日本の敗残兵が出没する事態のために、住民は村を棄てたことになっており、自動詞的な事態ではない。その他の例についても同様の観察ができると思われる。ここにおいて原因・理由の典型から大きく逸脱するわけである。これは、前項と後項の主体が異なっていることから、前項に表される事態は、後項の主体にとって意志的な動作とはなりえないからである。松田(1986)は、前項が名詞節の場合(1のような)は、コトニヨッテで接続助詞的な働きをしており、複文的構造として捉えることができるといって指摘をしているが、それが名詞句レベルにおいても拡張したものだと考えられる。

3. 3. 上接する名詞のタイプ

まず、名詞が上接し、手段・方法を表すニヨッテについて考えてみる。

現代日本語では、一般に手段を表す格助詞としては、デを用いるのが普通である。

(38) 自転車で通学する学生が多い。

(39) この単語の意味を辞書で調べなさい。

一方で、ニヨッテも用いられることがある。

(40) ジェット機によって敵に攻撃を加える。

(41) 手持ちの辞書によって調べる。

このデとニヨッテの差異については、デが話し言葉、書き言葉に関わらず広く用いられるのに対して、ニヨッテは、主に書き言葉で用いられるという文体的特徴がある。また、機能的には、デが広く名詞全般に接続することができるのに対して、ニヨッテのほうは限定されている。森田(1980)では、ニヨッテは、「一時利用する道具や手段では用いない」とされている。例えば、「はさみで切る。」とは言えても、「*はさみによって切る。」とは言わないとする。ニヨッテを使うことができる場合としては、「行為の遂行のために、主体に代わって機能を発揮し、事を成就させ得る物である」とする。ただし、(40)「ジェット機」は確かに「主体に代わって機能を発揮」するものと考えられるが、次の(42)も同様に考えられるが、(41)「辞書」や(43)「コンピュータ」は果たしてそのような解釈が可能かどうか、微妙なものといえるだろう。

(42) テヘランからロシア経由の鉄道によって運ぶ予定だったが、ロシア軍がドイツ・オーストリア同盟軍に大敗し、鉄道が不通になってしまったのである。(人民)

(43) コンピュータによって大量の文書管理が可能になった。(『日本語文型辞典』より引用)

(42)のニヨッテで示される「鉄道」は運ぶ行為においての方法・手段と考えられる。「運ぶ」上で有効に働く具体的な事物が「鉄道」であるということになる。

ニヨッテが単純な道具を取らないとされるが、一方、上接する名詞に道具を取ることが出来るデでは、述語の動作が意図的でなくてもよい。(44)では述語全体としては無意図的であるが、それでも「金槌で」は窓ガラスを割るという動作を行う道具としての意味を保持している。

(44) 僕はうっかり金槌で窓ガラスを割ってしまった。(仁田(1993)より引用)

こうしてみるとニヨッテには手段の意味があるものの、かなり制約を伴ったものであることが分かる。こうした手段の意味機能を抽出する方法として、山梨(1995)における格の解釈における考察が参考になると思われる。そこでは、格の意味役割の連続性について、デを例

に取って説明している。デは具格と原因格を極として、その間に次のような様相をみる。

- 〈具格的〉： 1. ハサミで新聞を切る。
2. 片手で綱を引っ張る。
3. クーラーで書斎を冷やす。
4. 雰囲気で観客を圧倒する。

〈原因格的〉： 5. 頭痛で学校を休む。

1「ハサミで」は具格の典型例、5「頭痛で」は原因格の典型例、その間の2～4については具格と原因格の間で解釈がゆれるものとする。2「片手で」はハサミよりも様態的な解釈に傾き、3・4では相対的に原因格的な解釈に相対的に強くなる。ここで注目すべきは、こうした意味解釈のゆれを相対的に決める要因として、複合的な視点を導入している点にある。具体的には次の5点が挙がっている。

- 〈具象性〉：対象が具象的(Concrete)に把握されるか
〈離脱性〉：対象が動作主体から離脱可能(Alienable)か
〈手動性〉：対象のマニュアル的な操作が可能(Manipulable)か
〈統御性〉：対象に対する直接的な統御が可能(Controllable)か
〈責任性〉：対象に変化に関する自立的な責任が内在する(Responsible)か

そして、これらのうち、責任性を除くすべてがプラスであるものを具格のプロトタイプ、一方、責任性のみがプラスであるものを原因格のプロトタイプとする。1「ハサミ」は主体が手で操作でき、意図的にコントロールできる存在であり、典型とみなされる。2「片手」はハサミのように主体から離脱可能な存在ではなくなっているため責任性と離脱性がマイナスである。3「クーラー」は、主体の動作が直接影響せず、クーラーの冷気によって書斎が冷えるので、手動性が欠けている。4「雰囲気」になると、主体のコントロールする力が弱くなる分、内在的な力が存在している解釈に傾いていく。したがって2～4のような場合は、中間的な解釈となっている。こうした考えを、ニヨッテに適応させて考えてみると、ニヨッテは「ハサミ」のような単純な道具は示すことができないので、典型的な具格は担えないのである。いいかえれば、ニヨッテが手段を表す場合、責任性とともな具象性、離脱性、手動性、統御性のいずれかが欠けている必要がある。(40)から(43)に見られる許容のゆれは、上に示したような連続的な様相のうえに位置づけられるためだと考えられる。鉄道やジェット機は、手動性に欠けていると考えられるが、もしすべてを許容すれば、「ハサミによって」も許容されることになる。

さて、こうした現象は、抽象的名詞によって特徴づけられる根拠・典拠の意味機能との連続性を示唆している。根拠・典拠を表すときの抽象的な名詞とは、こうした具象性、離脱性、

手動性、統御性のいずれかが欠けている性質がある。以下、手段を表す場合と根拠・典拠を表す場合との接点を求めながら見ていきたい。

(45) 後藤はその企画力と実行力によって、都市計画に交通に産業に、着々と治績をあげていた。(人民)

(45)のニヨッテは「治績をあげ」のように後項の述語動詞が意志的な動作であることから、手段・方法を表していると考えられる。ここでも、前項の名詞句である「その企画力と実行力」は手動性、統御性は備えているものの、具象性、離脱性は欠けている。

(46) 鶴川の住んでいた世界が明るい感情や善意に溢れていたとしても、彼は誤解や甘い判断によってそこに住んだのではなかったと断言できる。(金閣)

(47) 人間は錯覚によって生きている。(太郎)

(46)では後項述語動詞が「住む」という意志的な動作であることから、このニヨッテは手段の意味に捉えられる。しかし、前項の「誤解や甘い判断」は意図してできる行為ではなく、結果として「誤解や甘い判断」になったわけであり、その点で統御性に欠ける。(47)の「錯覚」についても同様である。

(48) アメリカの大学では、日本と違って講座制というものがなく、ポストの数はまず、その年の大学予算によって決まると言ってもよい。(若き)

(48)「大学予算」といった抽象名詞は、起こる状況の基準を示す、成立するための条件が提示されていると考えられ、具象性や統御性に欠ける。(48)では後項の述語動詞も自動詞であって、無意志的な動作を表している。こうした自動詞文の場合が根拠・典拠と考える。(48)のように後項の述語動詞が意志的な動作を表すと手段・方法を表す方に傾いていく。

(48) ポストの数は、その年の大学予算によって決める。

以上見てきたように、ニヨッテが手段・方法を表す場合の前項の名詞は、具象性、離脱性、手動性、統御性のいずれかが欠けたものであって、そういう意味では、根拠・典拠を表す場合の抽象的な名詞であるという名詞句のタイプと近い関係にある。したがって後項の述語動詞が意志的か無意志的であるかどうかという類型的な述語のタイプによって、手段と根拠・典拠の意味機能は分けることができる。

4 おわりに

ニヨッテの存在については、古く中古においてニヨリやニヨリテとして見られるものである。そして、室町末期から近世にかけては原因理由を表す接続形式として発達したことが知られる。この室町末期から近世における意味機能については、小林(1973)および(1977)などに詳細な考察がある。また、受身文の動作主を表す機能については、一九世紀以降、幕末か

ら明治期にかけて欧文直訳のなかから生まれたことが、金水(1991)などによって知られる。こうしたニヨッテの歴史的変遷と、以上見てきたような現代語における意味機能の拡がり、どのように関連しているのか、それについては今後の課題としたい。

用例出典

(国盗)『国盗り物語』司馬遼太郎、(世界)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹、(青春)『青春の蹉跎』石川達三、(一瞬)『一瞬の夏』沢木耕太郎、(人民)『人民は弱し官吏は強し』星新一、(検家)『検家の人びと』北杜夫、(山本)『山本五十六』阿川弘之、(エディ)『エディプスの恋人』筒井康隆、(若き)『若き数学者のアメリカ』藤原正彦、(孤高)『孤高の人』新田次郎、(金閣)『金閣寺』三島由紀夫、(太郎)『太郎物語』曾野綾子、(野火)『野火』大岡昇平、(さぶ)『さぶ』山本周五郎、(錦織)『錦織』宮本輝、(ブン)『ブンとファン』井上ひさし、(路傍)『路傍の石』山本有三、(パニ)『パニック・裸の王様』開高健、以上 CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』による。

主要参考文献

- 金水敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164
グループジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94
小林千草(1977)「サカイのゆくえー近世上方語におけるサカイとその周辺ー」『近代語研究』第五集
砂川有里子(1984)「〈くに受身文〉と〈によって受身文〉」『日本語学』3-7
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
張麟声(1995)「ニとカラとニヨッテ受身文における動作主マーカ―」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
仁田義雄(1993)「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店
野村剛史(1984)「～にとって／～において／～によって」『日本語学』3-10
細川由起子(1986)「日本語の受身文における動作主マーカ―について」『国語学』144
益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
益岡隆志 田窪行則(1987)『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
益岡隆志 田窪行則(1992)『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出版
松田剛史(1986)「受身文の「によって」」『大谷女子大関文』16
兼田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店
山梨正明(1993)「格の複合スキーマモデルー格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐる』くろしお出版

(にしもと かつひろ 岡山大学大学院博士課程)